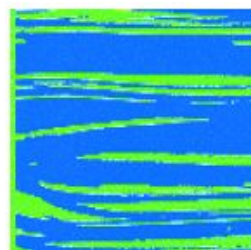


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABA ニュース



2024年 夏号 No. 115 (2024年7月7日発行) (2024年9月12日修正版発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 山岸 直基

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

目次

<総務委員会の報告> J-ABA パンフレットの今昔 村井 佳比子 (神戸学院大学)・下山 真衣 (信州大学)	2
<法務委員会の報告> 井澤 信三 (兵庫教育大学)・久保 尚也 (駒澤大学)	7
<渉外委員会の報告> 空間 美智子 (京都ノートルダム女子大学)・丹野 貴行 (明星大学)	9
<日本行動分析学会創立40年記念事業実行委員会の報告> 中鹿 直樹 (立命館大学)	10
<自著を語る> 書籍執筆のパフォーマンス・マネジメント：私のエビデンスベースト・プラクティス 東美穂 (慶應義塾大学)	11
<こんな論文書きました> 行動分析学のフロンティア：反応形成 折原 友尊 (明星大学)	16
<日本行動分析学会若手会からの報告> 福田 実奈 (北海道医療大学)	17
編集後記	19

＜総務委員会の報告＞

J-ABA パンフレットの今昔

村井 佳比子（神戸学院大学）・下山 真衣（信州大学）

J-ABA のパンフレットをご覧になったことはあるでしょうか？実は、現在のパンフレットは 2024 年にリニューアルしたばかりの“4 代目”になります。

1 代目のパンフレットは 1996 年、当時の理事長である小野浩一先生のもとで企画され、1997 年に作成、1998 年に公開されました。上質紙にカラーで 1000 部印刷されて、3 つ折りのパンフレットとして年次大会はもちろんのこと、公開講座や、高校生向けの出張講義などで配布されていたとのことです。このパンフレットが作成される以前には、「日本行動分析学会の御案内」という入会案内（B5 版）を作成、配布されていたとのことでした。

2 代目のパンフレットは 2016 年、当時の理事長である故・坂上貴之先生のもとで作成され、2017 年に 1500 部印刷されました。紹介文や組織図は坂上先生ご自身が執筆・作成し、写真は眞邊一近先生のオリジナルを使用しています。1 代目を引き継ぎ、ぎっしりと文字で埋め尽くされた裏面からは、学会への愛情と広報への熱意が感じられるのではないのでしょうか。

3 代目は 2019 年、当時の理事長である武藤崇先生のもとで作成され、2020 年に公開されました。2019 年の代議員選挙を経て新しい理事が就任し、これを契機にパンフレットをリニューアルしました。デザインは J-ABA のイメージカラーであるブルーを基調とし、学会ホームページからダウンロードする形式に変更しています。

4 代目は 2023 年、現理事長である山岸直基先生のもとで作成され、2024 年に公開されました。3 つ折り以外の他のデザインも検討したうえで、現デザインが選ばれました。諸活動の記載内容を充実させたほか、QR コードを活用する等、学会にアクセスしやすいパンフレットとなっています。

パンフレットは学会ホームページの「学会の概要」から、どなたでもダウンロードいただくことができます。

<https://j-aba.jp/aboutus/index.html>

学会ホームページには学会アーカイブや資料館など、貴重な資料やさまざまなコンテンツが隠れています。パンフレットをダウンロードするついでに、是非、探検してみてください。

※本ニューズレター発行後、記事内容の修正を行いました（2024 年 7 月 17 日）。修正箇所は 1 代目のパンフレットの説明です。最初、1 代目のパンフレットは 2016 年に作成されたと記載しておりましたが、それ以前に作成された 1998 年版のパンフレットが見つかったと、藤健一先生から情報提供いただきました。小野浩一先生にもご確認いただき、現在は 4 代目であることがわかりました。ご指摘に感謝申し上げますとともに、調査が不十分であったことを心よりお詫び申し上げます。

(行動分析研究)に掲載された論文より
(1990年2月号)：選択行動の研究における最近の展開
／現象学的な柔軟性とパフォーマンス／一般
環境法則性について／(2)法の自由度と選択行動データ
の態様性の検証／予備実験における状況決定と
「選択行動法則」と「認知行動法則」の確立
／既知行動の予測定シミュレーション／心理学と
数学の対比／行動統計学と選択行動／選択行動の
巨視的説明と微視的説明(1990年2月号)：選択行動生
徒に関する再考／より正確な選択行動生徒モデルの
構築／スチューデント環境変化の制御戦略(1990年3月)：
スキーマを学習に活かす／高年齢者の行動分析／言
語と一歩の行動分析／行動メタプログラムの意義に
関する文法と文法の浸透／学、術、知、能——他語
彙に関する Skinner の知恵(1990年3月号)：金銭に
関する行動分析の活用と金銭と人との関係／金
銭とソフトウェアの二つの文化／子供の選択シ
ステムを築くための試み／自然環境における自然行
動の分析／環境変化の非期待性要素と選択行動の形
成／言語習得と行動形成／環境変化と行動制御／
機械／言語学習：手帳通訳教育プログラムの開発
とその効果の検証／Generational expansion and
institutionalism from a response class for adults with
intellectual handicaps(1990年2月号)：訓練可能性に
関する行動物理学的の検証／環境の決定性とその不決定
性の学習における文法の役割(1990年1月号)：ノーマリ
ゼーションと行動分析／現象学における自然環境
変化の形成／この両者を比べると人間の意思の
形成はあつたのか／人意識について人間の意識の

・「身体障害者に対する意識の転換」行動の形成と地域との関係（本邦学者に対する）
・「海外視察」：多文化のチームアプローチによる発達障害児の支援／大学での行動分析学教育／フロンティアによる教育／アメリカ ①②を会場に入選するに当たって、アメリカの企業やビジネスにおける行動分析学／行動分析学の企業への応用（巻頭１号）；親戚等の一泊二泊進出・退場後の行動分析／関与性知的と実業分野においても成長プログラム（巻頭２号）のトビイロのセッション強化による反応率（巻頭３号）スチューデントの研究／行動分析プログラムのメタアナリシスの可能性について（巻頭４号）；確率的思考におけるスキューピング技術の活用／発達障害に対する「おまかせ作業」についての報告と活動計画（オマツ）の開発と比較（巻頭５号）；評定社会／自覚による他覚としてのスキューピング技術とは何か—ノース・スキーアの学習の目的地が区別／基礎的および応用的行動分析の重要性、スキューピングと日本の応用行動分析の発展／経歴、授業のCambridgeにて—Skinner先生に出会った時のことなど（巻頭６号）；人間および動物の条件付け（巻頭７）；主張点における言語獲得の読み込み（巻頭８）；人間の気持を伝える方法——一貫した標準化されたインストラクションによる意思伝達のための共同実践法によるシステムにおける決定の検証（巻頭９）；言行一致訓練の適用による「意図的」結果行動の自己制御の促進／システムにおける二つの世界認識訓練の適用例（巻頭１０）；作用反応における制約環境性の形成／強制訓練の分析

1998年3月

1998 年版パンフレット裏

人間の行動は、なぜどのように生じるのか、あるいはなぜ生じるのか、日本行動科学学会は、B・P・スキナーに始まる必要条件の行動分析から応用行動分析、理論行動分析の研究を推進し、さらに社会・職業的・社会的実践に適用しようとする人たちの集まりです。学会の目的は、様々な事象を捉えて、行動分析に関わる状況、教育、実践活動を促進し、社会に関心を持つ問題について的確や計画的な提議を促すことです。領域は幅広くにわたりますが、基礎と応用といった大枠を保持し、四者が、社会に重要な課題の理解を解決にむけて、必要なら理論設定を实证的研究で分析し、その実践のために行動することをモットーとしています。

青年会は、「行動分析研究会」として1979年にスタートし、1980年からは学会として第1回年次大会を開催し今日に至っています。その主な事業には、年に1回の年次大会と全国読者の国語、年2回の学会誌『行動分析学研究』の発行、年4回の会報『行動ニュース』の発行、インターネット上でのホームページ公開、および不定期の出版物の発行があげられます。また国内および諸外国の関連学会と研究者とを密接に連携して事業を展開していることも本学会の特徴です。

行動分析学会で扱われるテーマは非常に幅広く、行動の諸科学や発育的問題に関する基礎研究のほか、医療、教育、産業、福祉、障害を持つ個人に対する諸サービス、さらには行政などにもその対象領域は広がっています。

年次会費は、一般会員7000円、学生会員4000円、正会員(夫婦ともに会員で、どちらか一方会費を必要としない方)4000円、学生会(数論・解析学専攻)を構成する会の会費(費担)会員が8000円です。一般会員および学生会員には、学会誌およびニューズレターの無料配布、また年次大会、公開講座の参加に際して料金の割引があります。また上記には別に、当学会の維持運営や活動促進に経費的に参加していたり、特別会員は、1010000円です。

入会申込書にご記入の上、事務局へご送付下さい。料戻し、年会費の振り込み用紙を返らせていただきます。なお、学生会員は学生証のコピー又は、在学証明書が必要です。

〒134-0012 東京都葛飾区新小岩1-23-1
 筑波大学文学部心理学研究室内
 日本行動分析学会事務局
 電話：03-3418-9000 / FAX：03-3418-9126
 メールアドレス：NPO0550@niftyserve.or.jp
 ホームページ：
<http://marine.nie.ac.jp/~behavior/>



c/o Department of Psychology, Komazawa University
1-23-1 Komazawa, Setagaya-ku, Tokyo 154-0012, Japan
tel. 03-3418-9381 / fax 03-3418-9126

氏名：
生年月日： 年 月 日
住所：〒
電話・FAX：
E-mail：
初級生／義礼／学生の協会、学校名／学年：
勤続先の住所：〒
電話・FAX：
最終学歴：
研究テーマ／関心のある領域：

宛名：取り敢ってお使い下さい。

〒154-0012
東京都世田谷区駒沢 1-23-1
駒沢大学文学部心理学研究室内
日本行動分析学会事務局御中

2017年版パンフレット表

入会について

入会資格は特にありません。どなたでも会員になれます。

会員の特典には、以下のものがあります。

- ・年2回発行の学会誌『行動分析学研究』や年次大会の発表論文集、その他本会の発行する資料の配布を受ける
- ・年次大会および学会誌上での参加・発表資格を有する
- ・委員会より安い会費価格で、学会誌の購入や年次大会の参加・発表ができる

※入会年度は、毎年4月1日より新年度になりますのでご注意ください。

※4月から入会を希望される方は、1月中旬以降にお申込み下さい。

会費

正会員 7,000 円

正会員(1) 4,000 円

賛助会員(2)

- (1) 学部学生、大学院生であって、学生であることを証明する所定の手續きを経た者、ならびに正会員の配偶者であって、機関誌の配布を希望する旨申し出て所定の手續きを経た者。
- (2) 当学会の活動を積極的に支援くださる場合とします。ご相談ください。

※年度途中の入会の場合も上記の会費となります。

※機関誌「行動分析学研究」のみを購読する機関は、年会費を8,000円とします。

■日本行動分析学会の組織(2016年12月1日現在)



総務委員会(ホームページ)(用語検討)
 法務委員会(倫理)
 財務委員会
 学外委員会(ニュースレター編集)
 企画委員会
 編集委員会(機関誌編集)(学典編集)

各委員会は理事2名の下で運営されています(括弧内は特別委員会)。理事には、理事会を統括する理事長、副理事長、事務局長が含まれています。

■年次大会
 1年に1回年次大会が開かれます。これまで下記の会場で開かれました。

大阪市立大学・明星大学・弘前大学・徳島大学・高知リハビリテーション学院・早稲田大学・神戸親和女子大学・筑波大学・横浜国立大学・立教大学・関西学院大学・常盤大学・帝京大学・岡山大学・日本大学・西南学院大学・東京学芸大学・北海道医療大学・慶應義塾大学・愛知心身障害者フットボール・上越教育大学・兵庫教育大学・駒澤大学・立命館大学・広島大学・愛知大学

日本行動分析学会への入会をご希望の方は

<http://www.j-abs.jp/contact.html>

または下記のQRコードをご利用ください。



掲載写真はいずれも2015年に開催された日本行動分析学会年次大会のスナップです。(photo by K.Marabe)

一般社団法人日本行動分析学会
ご入会のおすすめ

実験科学的な知見に基づき、行動の予測と制御を目指す



2017年版パンフレット裏



行動分析とは

行動分析は、20世紀半ばに米国の心理学者B.F.スキナーの創始した、行動の予測と制御を目指した実験的、応用的科学です。行動分析学の特徴は、心的な用語や概念に頼らず、環境要因と行動との相互関係をアレンジすることで、行動を理解しようと考えている点にあります。また、他の心理学的方法論と異なり、行動の機能的な傾向を知ることよりも、個体や個人が行動をいかに予測したり制御したりするかに重点が置かれており、一事例での科学的探究法(シングルケースデザイン)の確立に向けた努力がなされてきました。そしてこの学に関わる研究者や実践家は、厳密に統制された実験実験での結果と、現実場面での実際の行動変容とを結びつける不撓の試みも、学会で活動を通じて行ってきました。

日本行動分析学のあゆみ

本学会は、「行動分析研究会」として1979年にスタートし、1983年には学会として第1回年次大会を開催しました。1987年には日本学術会議に学術研究団体として登録されました。2013年には30周年を記念して「開かれた行動分析学」に向けて「シングルケースデザインをめぐって」と題するシンポジウムが開かれました。そして2015年には一般社団法人として歩むことになり、「特別支援教育と行動分析学の役割」と題する記念パネルディスカッション開催されました。また、同年9月には京都においてABAI 第6回国際会議が開かれました。本学会と様々な支援を行ってきた。(ABAIは米りに本部を置く国際行動分析学会Association for Behavior Analysis Internationalのいい、本学会はこれに加盟し、その一部として国際的な情報交流や事業展開を積極的に行っています。)

The Japanese Association for Behavior Analysis
 一般社団法人日本行動分析学会

The real problem is not whether machines think but whether men do.
 (Confingencies of Reinforcement, 1969)

No theory changes what it is a theory about; man remains what he has always been.
 (Beyond Freedom and Dignity, 1972)
 - Burrhus Frederic Skinner
 (March 20, 1904 - August 18, 1990)

日本行動分析学会の目的と領域

学会の目的は、様々な事業を通して、行動分析学に関わる研究、教育、実践活動を促進し、会員が関心を持つ問題についての情報や討論の場を提供することです。

行動分析学で扱われるテーマは非常に幅広く、行動科学や倫理的問題に関する基礎研究のほか、医療、教育、産業、福祉、障害を有する個人への諸サービス、さらには行政などにもその対象領域が広がっています。

こんなあなたが行動分析学を支えます。

- 行動分析学を支えているのは、例えば、このような人たちです。
- ヒトを含む動物での学習や行動の基礎研究に関心のある方(例えば心理学の教員、院生、学生で動物実験を通じて行動の研究をしている方、や、動物園・水族館で学ばれている先生方)
- 様々な教育現場での実践に関心のある方(例えば幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校などで教わられている先生方)
- 障害を有する個人への支援に関心のある方(例えば特別支援教育や自閉症支援などに携わる教員の方々)
- 医療現場での行動的な支援に関心のある方(例えば医師、看護師、CT、PT、STなどの医療現場に携わる方)
- 産業現場での様々な活動のアレンジに関心のある方(例えばマーケティングや販売促進、新製品の活動などに行動的な知見を取り入れていきたいと考えている方)
- 行動分析学を支えている行動の哲学である徹底的行動主義をはじめとする行動主義哲学や、行動の数理的解析に関心のある方(例えば生物の哲学や行動に関心のある研究者の方)

日本行動分析学会の諸活動

- 学会機関誌「行動分析学研究」
 会員の投稿論文を中心に編集された機関誌が年に2回、発行されています。これまでの主な特集のテーマは次の通りです。
 ・エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端
 ・行動分析学の実験研究とその応用可能性
 ・行動分析学による普通教育に対する寄与の拡大をめざして
 ・行動分析と倫理
 ・人間行動の実験的分析
 ・行動経済学の現在
 ・パフォーマンス・マネジメント
- 出版物
 学会に設置された委員会を通じて、これまで何冊かの書籍を返り出してきました。そのいくつかをご紹介します。
 ・ケースで学ぶ行動分析学による問題解決(金剛出版)
 ・行動分析学の倫理—責任ある実践へのガイドライン(二橋社)
 ・初めての行動分析学実験: Visual Basicで学ぶ実践プログラムミグ(ナカニシヤ出版)
 ・行動分析学研究アンソロジー2010(昭和書店)
- 学会費
 学会では論文費と実証費という2つの学会費を設け、行動分析学への貢献を表彰しています。最近のいくつかをご紹介します。
 ・松本孝子氏「美容師の指名客数増加のための社会的スキルトレーニングの効果」(行動分析学研究 第29巻 第1号 論文賞)
 ・丹野真行氏「行動分析学における政策・巨視論争の整理」(行動分析学研究 第25巻2号 論文賞)
 ・鎌倉やよい「看護学領域における行動分析学の研究および実践の普及」(2015年度 実践賞)
 ・飯田美枝子「940年間にわたっての障害のある子供の教育についての優れた実践及び研究と、障害のある子どもと保護者に対する新しい貢献」(2012年度 実践賞)
- 研究会・自主公開講座
 行動分析学に関する研究会や行動分析学の普及や啓蒙、あるいは行動分析学を取り入れた実践活動の紹介等を目的として開催される「自主公開講座」を支援する事業を行っています。詳しくは学会ホームページのニュースをご覧ください。
- 声明
 2014年には行動分析学の立場に立つ学会として、「『体罰』に反対する声明」を発表しました。

お問い合わせ先

【学会名】一般社団法人日本行動分析学会
 【事務局住所】〒540-0021 大阪市中央区大手道2-4-1
 リーフレス内 一般社団法人日本行動分析学会事務局
 【電話】Tel/Fax: 06-6910-0090
 【電子メール アドレス】j-abs.office@j-abs.jp
 【Web アドレス】<http://www.j-abs.jp/>

2024 年版パンフレット表

日本行動分析学会とは

人は、なぜそのように行動するのか、あるいはまた、なぜ行動しないのか。
日本行動分析学会は、BEF スキナーに始まる実験的行動分析、応用行動分析、理論行動分析の研究を推進し、さらにそれを臨床的・社会的実践に適用しようとする人たちの集まりです。

学会の目的は、様々な事業を通して、行動分析学に関わる研究、教育、実践活動を促進し、会員が関心を持つ課題についての情報や知見を提供することです。

領域は多岐にわたりますが、基礎と応用といった近接性を保たずに、科学的に重要な諸問題の理解や解決に向けて、必要な準備設定を実証的に分析し、その実践のために行動することをモットーとしています。




日本行動分析学会の組織



総務委員会 (事務局、ホームページ)
 連絡委員会 (定款、規程)
 財務委員会 (予算、助成)
 渉外委員会 (ニュースレター、国際)
 企画委員会 (論文賞・実践賞・年次大会)
 編集委員会 (機関誌編集、事務・用紙編集)

日本行動分析学会 事務局

F5-40-0021
 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
 日本行動分析学会事務局 3F

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会ホームページ

<https://j-aba.jp/>



一般社団法人 日本行動分析学会 入会のご案内



実験 科学的な知見に基づき
**行動の予測と
 制御を目指す**

The Japanese Association for Behavior Analysis
 一般社団法人 日本行動分析学会

2024 年版パンフレット裏

入会について

入会資格は特にありません。どなたでも会員になれます。

会員の特典には、以下のものがあります。

- ▶ 年2回発行の機関誌「行動分析学研究」や年次大会のプログラム、その他本会の発行する資料の配布を受ける
- ▶ 年次大会および機関誌への参加・発表資格を有する
- ▶ 非会員よりも安い会員価格で、機関誌の購入や年次大会の参加・発表ができる

※入会年度は、毎年4月1日より新年度になりますのでご注意ください。

会費	正会員	7,000 円
	正会員 ⁽¹⁾	4,000 円
	賛助会員 ⁽²⁾	

(1) 学部学生、大学院生であって、学生であることを証明する所定の手続きを経た後、並びに、正会員の配偶者であって、機関誌の配布を承諾する者。
 (2) 当学会の活動を経済的に支援くださる場合とします。ご相談ください。
 ※年度途中の入会の場合も上記の会費とします。
 ※機関誌「行動分析学研究」のみを購読する機関は、年会費も6,000円とします。

入会申し込み

入会申込みフォームから申込み下さい。入力フォームをご利用されない方は、入会申込書をダウンロードし必要事項をご記入の上、メール添付もしくは郵便にて事務局までお送りください。

折り返し、年会費の振り込み用紙をお送りします。

入会申し込みフォーム
<https://www.j-aba.jp/application.html>



沿革と事業

本学会は、「行動分析研究会」として1979年にスタートし、1983年には学会として第1回年次大会を開催しました。1987年に日本学術会議に学術研究団体として登録され、さらに2015年には一般社団法人となり、今日に至っています。

主な事業としては、年次大会および公開講座の開催、年2回の機関誌「行動分析学研究」の発行、会報「J-ABA ニュース」の発行、インターネット上のホームページ公開、および不定期の出産物の公刊などがあげられます。

また米国に本部を置く国際行動分析学会に加盟し、その一部として国際的な情報交流や事業展開を積極的に行っていることも本学会の特徴です。

カバーする領域

行動分析学で扱われるテーマは非常に幅広く、行動科学や倫理的問題に関する基礎研究のほか、医療、教育、産業、福祉、障害を有する個人への諸サービス、さらには行政などにもその対象領域が広がっています。

THE JAPANESE ASSOCIATION FOR BEHAVIOR ANALYSIS

日本行動分析学会の諸活動

年次大会
 1年に1回年次大会を開催しています。
 近年開催会場は京都大学、愛知大学、同志社大学、福島大学、大阪市立大学、明星大学、弘前大学、岐阜大学、ほか

学会機関誌「行動分析学研究」
 会員の投稿論文を年2回に編集された機関誌が年に2回、発行されています。
<https://www.jstage.jstgo.jp/browse/jjba-char/ja>

出版物
 ・ケースで学ぶ行動分析学による問題解決 (金剛出版)
 ・行動分析学の倫理—責任ある実践へのガイドライン (二松社)
 ・初めての行動分析学実験: Visual Basicで学ぶ実験プログラム (ミツバ社)
 ・行動分析学研究アンソロジー2010 (昭和書局)
 ・行動分析学事典 (丸善出版)
 ・Rでわかるシンボルズデザイン (ratik)
 ・新録画ことばと行動: 言語の基礎から臨床まで (金剛出版)



学会賞・若手研究者優秀発表賞・学生研究者大会発表助成制度
 学会では論文賞と実践賞という2つの学会賞を設け、行動分析学への貢献を表彰しています。さらに、若手会員の研究を奨励するための、若手研究者優秀発表賞を設けるとともに、学生研究者大会発表助成制度を実施しています。

研究会・自主公開講座等助成事業
 行動分析学に関する研究会や行動分析学の普及や啓蒙、あるいは行動分析学を取り入れた実践活動の紹介等を目的として開催される「自主公開講座」を支援する事業を行っています。また、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、ABA/SQAB等への参加助成を行っています。

声明・ガイドライン
 2014年「[声明]」に対する「[声明]」を発表
 2023年「[強行行動規範]」に関する支援ガイドラインを公開

資料館
 学会ホームページには「動画で学ぶ行動分析学」「行動分析学歴史資料館」「学校支援関係アーカイブ」「強行行動規範特別アーカイブ」等、貴重な動画や資料が公開されています。

＜法務委員会の報告＞

井澤 信三（兵庫教育大学）・久保 尚也（駒澤大学）

法務委員会は、井澤と久保の2名で担当しています。法務の仕事としては、(1)定款等の規則の整備、(2)選挙、(3)倫理委員会、等があります。今回、法務委員会の仕事を紹介させていただきます。まず、井澤からは、(1)と(2)についてです。

（1）定款等の規則の整備

本学会が2015年に一般社団法人となり、それに伴い、定款等の規則の整備は重要な位置づけとなっています。一般社団法人とは、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（平成18年法律第48号）」に基づいて設立された社団法人のことをいいます。一般社団法人は、設立の登記をすることによって成立する法人です。一般社団法人の設立には、定款が必要であり、その定款に従い、活動していきます。本学会の定款の第3条（目的）と第4条（事業）には、以下のように記されています。

第3条 この法人は、行動分析学の研究を促進すると共に、関係者間の連帯共同によって、行動分析学の進歩を図ることを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 行動分析学に関する年次大会、学術集会、研究会等の開催
- (2) 行動分析学に関する教育事業
- (3) 行動分析学に関する機関誌及び学術図書の発行
- (4) 関連諸団体との情報交換及び国際交流
- (5) その他前各号に関連する事業

毎年の年次大会や機関誌発行も定款に従い、事業として行っています。後ほど紹介されるダイバーシティおよびハラスメント・ポリシーも、

そのような規則の整備につながっていくものです。

（2）選挙管理委員会

定款に従い、4年に1回の代議員選挙、2年に1回の役員（理事・監事）と理事長選挙を管理・運営するのが、選挙管理委員会です。前回の代議員選挙は、選挙管理委員長の島田茂樹先生（常磐大学）のもと実施しました。代議員選挙は立候補制となっており、多くの方に立候補していただくことが学会の活性化にもつながると思います。次期の選挙の際には、どうぞ前向きにご一考ください。

次に、久保からは下記2点について紹介させていただきます。ひとつは倫理委員会について、もうひとつはダイバーシティおよびハラスメント・ポリシーについてです。

（3）倫理委員会について

新体制への移行にともない、倫理委員会も新たなメンバーで運営することになりました。今期の倫理委員会委員は、佐藤美幸先生（京都教育大学）、竹内康二先生（明星大学）、長谷川福子先生（筑波大学）、吉野俊彦先生（神戸親和大学）、そして久保（駒澤大学）の計5名となります。

倫理委員会の目的は、会員の諸活動の倫理的公平さを維持するための活動を行うことです。基本的な活動は、倫理綱領の整備、会員から提訴された本学会の倫理綱領に違反している問題への対処となります。今期は従来の活動だけでなく、可能であれば、学会員のみなさまの研究倫理の考えが深まるような活動も何か行えればと考えております（次期になるかもしれませ

ん・・・)。

(4) ダイバーシティおよびハラスメント・ポリシーについて

これら 2 つのポリシーの作成については、総務委員の先生方と協力しながら作業を進めることとなりました。前者のダイバーシティ・ポリシーについては、5 月 15 日に学会 HP に公開されました。第 42 回年次大会もこのポリシーに従って開催されますので、年次大会参加前にぜひご一読ください。

後者のハラスメント・ポリシーについては現

在、鋭意作成中です。また、このポリシーの作成と同時に、ハラスメント防止規程の作成にも着手しております。これらポリシーの策定および規程の制定の目的は、学会員あるいは本学会に関連する皆様が安心して学会活動に取り組める環境を構築することとなっています。こちらについても理事会での承認が得られ次第、学会ホームページにて公表されるかと思います。公表された際はぜひご一読いただき、“J-ABA は居心地がよい”と誰もが感じられる学会の雰囲気づくりにご協力いただければ幸いです。

＜渉外委員会の報告＞

空間 美智子（京都ノートルダム女子大学）・

丹野 貴行（明星大学）

渉外委員会の現在の活動をご報告させていただきます。2023 年 6 月に発足した現理事会体制では、空間と丹野が渉外委員を担当させていたでいています。空間が国外、丹野が国内担当です。国外業務は、国際行動分析学会 (Association for Behavior Analysis International: ABAI) の支部としての活動と、その ABAI 年次大会の Expo での日本行動分析学会の紹介などです。国内業務は、ABAI/SQAB 参加助成事業と、J-ABA ニューズの発行です。また、日本行動分析学会若手会は渉外委員会に紐づけて組織されています。これは若手会が日本学術会議の要請に従う形で設けられたことに起因しています。これより、若手会の活動、たとえば年次大会における若手研究者優秀発表賞の運営などにも共同で当たっています。

現体制での大きな変更を 2 つご報告させていただきます。1 つめは、J-ABA ニューズの発行回数を、年 4 回から年 2 回へと減少させたことです。この経緯については、J-ABA ニューズの 2023 年秋号に「編集の辞」として記しています (<https://j-aba.jp/journal/nl113.pdf>) ので、詳細はそちらをご参照ください。

2 つめは、若手会からの意見をくみ上げる形

で作られた、「学生会員年次大会発表助成制度」です(以下のサイトをご確認ください https://j-aba.jp/award/data/member_student2024.pdf)。学生会員の多くは、複数の学会に所属しそこでの発表を行っていることでしょう。そして、たとえば日本心理学会での発表で出費がかさむので日本行動分析学会の参加・発表は諦める、そういったケースが散見される、これを改善したいという要望が若手会より寄せられました。2024 年 6 月現在の日本行動分析学会のホームページには、本学会の目的を述べた一文の中で、“行動分析学に関わる研究、教育、実践活動の促進”が挙げられています (<https://j-aba.jp/aboutus/outline.html>)。学生会員の研究活動の活性化はこの目的に大きく資するものだと考えます。理事会での審議を経て新設されたこの「学生会員年次大会発表助成制度」では、ポスター発表の第一発表者となっている学生会員の大会参加費が免除されます。また、遠方から参加する学生のために、大会会場までの交通費の一部助成も含まれています。こうした随伴性の整置により、若手会員の研究活動がさらに活性化することを期待しています。

＜日本行動分析学会創立 40 年記念事業実行委員会の報告＞

中鹿 直樹（立命館大学）

日本行動分析学会は前身の「行動分析研究会」として 1979 年にスタートし、1983 年に学会として第 1 回年次大会を開催しました（学会サイト『概要と沿革』より）。昨年 2023 年は創立 40 年の節目の年でした。40 年を迎えるにあたり、創立 40 年記念事業準備委員会（後に実行委員会）が組織され、理事会と連携しながら事業の準備・実施にあたってまいりました。事業を終えるにあたりニューズレターで皆様に概要をご報告いたします。

創立から 40 年を経過しましたので、学会創立の時を知る先生方の中には亡くなられた方も多くおられます。様々なことを継承するのが難しくなってきたように思います。準備委員会として「古いものを継承して新しい時代を築く」という方針を立ていくつかの企画を計画いたしました。

企画の一つは上記方針に関するシンポジウムの開催でした。以下の 3 つのシンポジウムを実施しました。

- ・ 「師の教えを刻んで—行動分析学を基にした臨床スキルの継承—」第 40 回年次大会
- ・ 「実験的行動分析を未来に繋ぐ」第 41 回年次大会
- ・ 「『ことばと行動』がつなぐパトン」横浜学術集会

それぞれのシンポジウムについては過去のニューズレターに記事がありますのでぜひご参照ください。

もう一つの企画はアンソロジーの発行です。30 年記念事業の際にも「行動分析学研究アンソロジー2010」が編集・出版されました（出版は

2011 年）。アンソロジー2010 は初学者に行動分析の全体像を知ってもらうものとしてよくまとまっています（武藤先生による編集後記「行動分析学を味わうために」参照）。私も、行動分析を学びたいという学生にはアンソロジー2010 の通読を薦めてきました。よい手本がありましたので、40 年記念事業でもアンソロジー2023 年版を計画いたしました。2011 年からのこの 10 年余りの間には多数の行動分析の書籍が出版され、行動分析に関する本の状況は大きく変わってきました。そこで今回は Web 上での公開をすることといたしました。

シンポジウムについては動画撮影をいたしましたので、学会の Web ページでの公開を予定しています。アンソロジーについても動画にあわせた Web 公開を予定しています。これらの公開をもって記念事業は終了となります。

2023 年には学会創立 50 年を迎えます。その時の行動分析学をめぐる状況はどうなっているかは予測できませんが、今回 40 年事業にご協力いただいた若手の先生方はそのころには、中堅として行動分析学会を支えてくださっていると確信いたします。学会員の皆様により研究・実践を通じて行動分析学が発展し、その先に 50 年記念事業が待っていると思います。行動分析学の歴史をこれからも積み重ねてまいりましょう。

※本記事にあわせて実行委員会で運営していた x（旧 twitter）もお読みください。アンソロジー2010 の論文紹介もしています。

<https://x.com/Jaba40thKinen>

＜自著を語る＞

書籍執筆のパフォーマンス・マネジメント：

私のエビデンスベイスト・プラクティス

東 美穂（慶應義塾大学）

2024 年 3 月 29 日に発売された、一般社団法人公認心理師の会 教育・特別支援部会監修『公認心理師必携！事例で学ぶ教育・特別支援のエビデンスベイスト・プラクティス（金剛出版）』について、分担執筆者として携わった際の執筆記について報告します。私は、東京都立大学（慶應義塾大学名誉教授）の山本淳一先生と第Ⅱ部の第 2 章、第Ⅳ部の第 2 章を担当しました。第Ⅱ部の第 2 章では、行動分析学研究をはじめとする 10 の学術誌を対象に、2017 年から 2023 年までの論文のデータベース化をしました。その選択基準は、本書をご覧ください。少なくとも Pre-Post で定量的に評価した発達・教育・特別支援教育の論文を 171 編抽出し、従属指標ごとにリスト化しました。例えば、社会的スキル、アカデミックスキル、不安・うつ・ストレス、問題行動などです。抽出した 171 編の論文は、文献リストに整理されており QR コードをスマートフォンで読み取ることで、論文の PDF を端末内に読み込むことができます。第Ⅳ部の第 2 章では、発達・教育・特別支援教育における行動分析学をもとにした単一事例研究の活用方法、エビデンスとしての重要性をまとめました。

はじめに

私は現在、公認心理師・臨床心理士として、医療機関でカウンセリング外来をもち、大学で非常勤講師をしながら、慶應義塾大学社会学研究科博士課程で研究活動を行っています。臨床経験は、今年で 12 年目となりました。2012 年 3 月に臨床心理学専攻の修士課程を修了後、大学病



院の小児科部門に就職し、以降、小学校スクーラウンセラーや震災地域でのボランティア活動（スクールカウンセラーなど）にも従事してきました。本格的に、研究者人生がスタートしたのは、2019 年です。

私が、研究者を志した理由の一つに、「適切な支援を 1 人でも多くの人に提供し、問題を解決したい」という熱い臨床家魂があります。大学病院では、「なぜこんなに重症な方が多いんだろう」「重篤化する前になんとか問題を解決、軽減することはできなかったのだろうか」と悶々としながら仕事をしていました。当時の私は、エビデンスに基づいた支援を適切に行うための

知識も技術も乏しかったと感じています。適切な臨床スキルを身につけ、エビデンスをもとに目の前の患者さんの問題を解決し、さらには問題を解決・軽減しやすい社会、問題発生を予防できる社会を目指すべく、臨床研究を行いたいと強く思い、茨の道に入る選択をしました。

慶應義塾大学では、発達障害のある子どもへの臨床介入実験を行い、客観的データに基づいた成果を論文、学会発表を通して社会に発信するとともに、週 180 分以上の臨床実習を 3 年間受けました。そのほか、慶應義塾大学の授業には実践的で、かつ最先端で活躍されている非常勤講師の先生方の講義も多く、気づいたら 60 単位（修了要件 20 単位）を取得しており、学費のもと十分に取ることができました。

執筆記

博士課程に入学後は、それまで以上にエビデンス、客観的データに敏感になり、臨床現場でも支援の成果を重視し、PDCA をまわす努力をしてきました（もちろん患者さんに合わせながら、負担をかけずにベストプラクティスを吟味しています）。実践家としての成果、問題を解決できたという実感ももてることが増えました。また、研究者としての成果も積み上がっていました。そんな 2023 年 4 月 13 日。山本先生からのお誘いで、『公認心理師必携！事例で学ぶ教育・特別支援のエビデンスベイスト・プラクティス（金剛出版）』の共著者となりました。本の執筆は夢の一つであり、まさに今、私が大切にしているエビデンスに基づいた臨床的

な技術を集約した本の執筆に関われるなんて、夢のまた夢で、心の底から嬉しかったことを覚えています。しかし、そこから、2 本目の茨の道がはじまりました。原稿締め切りは 6 月 30 日。その後、急ピッチで執筆作業に取りかかりました。山本先生が本文の執筆を主に担当し、私は文献のマッピング、用語整理、構造化文献リストの作成を主に担当しました。おおまかな作業の流れを図 1 に示しました。

1. 論文の抽出作業

まず 1 日かかりで、本書 P32 に記載された条件で学術誌を検索し、はじめに 227 編を抽出しました。論文抽出作業を通して発見したことがいくつかあったので、以下に示しました。

- J-STAGE に掲載されていなかった雑誌：「子どもの心とからだ」と「心理臨床学研究」
- 購読者番号を入手（購読料課金）しないと閲覧できない文献が多い雑誌：「カウンセリング研究」「脳と発達」
- 医療系雑誌は介入研究がほぼない（「脳と発達」で 1 件のみ抽出できたが、症例報告であった）。
- ある雑誌では、独立変数と従属変数が明確ではない論文が多く掲載されていた（研究の再現性がない）。
- 抽出条件の最低ラインが、Pre-Post だったが、臨床介入の論文の場合は、Pre (BL) 評価がなく、介入の効果を継続的に複数回評価することで量データを計測する方法が取られやすい（臨床的には、BL を取らずにすぐに介入したい気持ちもよくわかる）。



図 1 執筆作業の流れ

2. 抽出論文の精査

次は、トータル2,3日くらいかけて、集中的に抽出論文の精査を行いました。そのうちの10時間は、山本先生と対面でぶっ続けて精査作業を行いました。お昼ご飯を食べるのも忘れていたような気がします。確か、遅めのお昼（早めの夕飯？）を大学近くのイタリアンでいただきました（実は、注文したのと違う料理が出てきたのですが、違うと言えずにそのまま食べました笑）。精査の結果、227編から171編に選び出しました。

3. マッピング作業

精査が一通り終わったところで、それぞれの文献の内容を統一のフォーマットにマッピングする作業に入りました。マッピングは、ほぼ丸一日で完結させたと思います。具体的なマッピング項目は本書P36～P41の「表1～表4ターゲット行動別論文リスト」をご参照ください。

4. 用語の整理、統一

マッピング作業と同時進行で、「行動分析学事典」「認知行動療法事典」を参照し、用語統一の作業を行いました。どちらの事典に準拠するかは、山本先生と吟味し、より読者に馴染みのありそうな用語、読みやすい用語を選択した。例えば、「セルフモニタリング」は、行動分析学事典では「自己モニタリング」、認知行動療法事典では「セルフモニタリング」と表記されています。「セルフモニタリング」の方がよく使用されている、馴染みがあると判断し、採用しました。

5. マッピング情報の構造化文献リスト（表作成）

マッピング作業と同時進行で、「標的行動と文献の紐づけ作業」と称し、標的行動、文献、対象属性、対象人数、支援技法を一覧できる表を作成しました（本書P36～P41の表1～表4ターゲット行動別論文リスト参照）。表の作成は、どのような表記がわかりやすいか、試行錯誤しながら時間をかけて調整しました。ちまちま作業をしながら、トータル2週間くらいかけて、

表の整理と修正、改良を繰り返し、完成させました。

6. 本文の執筆

マッピング、用語整理、構造化文献リスト作成と同時進行で、本文の執筆にも取りかかりました。本書は、公認心理師という実践家が読者なので、実践家に響く言葉、文面にするため、「書いた文章」ではなく「しゃべった文章」を心がけました。「しゃべった文章」をまとめる方法としては、実際に「しゃべる」ことです。山本先生の頭の中の生の論理構造をそのままトークしていただき、それを文字起こしアプリを使ってリアルタイムで逐語を作成し、その後私が微調整を行いました。山本先生が講演でもしているかのような、目の前で語りかけているかのような文章が生成されました。そして、その「しゃべった文章」を、さらに山本先生が洗練させ、完成しました。

7. 原稿の提出および校閲作業

血と汗の結晶である原稿を期日までに完成させ、無事に編者者に送ることができました。その後、編集者から校閲依頼がきました。ついに、茨の道を抜ける時が見えてきました。金剛出版の編集者の方と共に校閲作業に入りました。

私は、本の出版に関わるのは初めてなので、校閲の方法を知りませんでした。校閲の記号の説明もなく、記号の意味および校閲スキルを、編集者の校閲を見て学びました（セルフ0JT）。自分が朱入れを行う時も編集者の書き方を真似て同じ記号を使いました。朱入れが終わった原稿を見返していると、あたかも「執筆慣れ」しているかのような気分には錯覚しました。ちなみに、私は、模倣で学習するのが得意です。臨床実習でも、先生の行動の形態と機能を模倣してスキルを習得していました。

校閲作業を通して感じ、学んだことは、「丁寧な作業」です。日々、とても忙しく、慌ただしく、24時間じゃ足りないくらいの感覚で過ごしています。「手なり作業」になってしまいそうですが、編集者の方の原稿へのコメントを拝見し、

「丁寧な作業」に感服しました。私たち実践家は、「丁寧な支援」を行います、編集者の方も我々と同様にその道のプロです。執筆作業に間違いがあつてはいけません（論文も研究も仕事もうまいかないことはあつても間違いがあつてはいけない！）。

編集者の校閲はとても丁寧で、コメントも綺麗な字で書かれていました。執筆者に伝えたい内容が誤解なく正しく伝わるように、ということとは当たり前ですが、「手なり作業」ではなく、愛情をもって丁寧に優しく校閲しているのが伝わってきました。私も普段は蛇のような荒れた字を書きますが、この時は、一字一字丁寧に魂を入れて書き、矢印や線を引く部分も（上から線を引く、下から線を引くなど）ルールを作つて統一して書き入れていきました（ちなみに、鉛筆で下書きをして間違いがないことを確認してから、赤ペンで清書しました）。山本先生、編集者の方との共同作業により、素晴らしい原稿が仕上がりました。

「成果物」という喜び ＝最高・最強の強化子

校閲作業も無事に終わり、まだかまだかと本の完成を楽しみに待っていました。本が届いた時には、なんとも言葉で表現できないような感情が湧き出て、ニヤニヤと口元が緩んでいました。お世話になっている職場の医師や恩師に送るため、追加で購入し、謹呈しました。論文や学会発表も、ある種の成果物であり、確かなエビデンスを基盤に社会に発信するものです。しかし、本は、それらよりも日常生活においてより身近な存在であり、実践家の目に触れる機会も多くあると思っています。その本が完成し、自分の目の前に現れたときは、ぶっ続けの 10 時間の対面ミーティングも、徹夜して文献を抽出したり、表整理をしたり、過酷な執筆環境も全く苦に感じなくなります。私にとって「成果物（本、論文、学会発表など）」は、研究活動のみならず

臨床活動においても強化子として機能しています。

推しポイント（読みどころ）

最後に、我々が担当した章の推しポイントを 2 つお示しします。1 つ目の推しポイントは、ターゲット行動ごとに、文献と支援方法を整理した点です。実践現場で実際に支援を行う際、どのような支援がこの子に合っているのか、このターゲット行動に対する支援方法にはどんな効果的な方法があるのかを調べる際に、辞書的に使うことができます。2 つ目の推しポイントは、今回抽出した 171 編の論文に 3 秒 3 ステップ（①カメラ起動→②QR コードを読み取る→③URL をタップ→文献リスト）でアクセスできることです。本書 P42～P51 には、文献リストを掲載しています。そして、P51 にある QR コードをスマホで読み取ると、文献リストをスマホの中に読み込むことができます。そして、読みたい論文の DOI をタップすることで無料かつ秒で論文をスマホにダウンロードすることができます。文献リストをブックマークしておくことで、本書を持ち歩かなくても、いつでもどこでも 24 時間、片手で論文に触れることができます（コンビニよりも Uber よりも早くて便利）。公認心理師の日常生活に閲読文化の到来です。

最後に

山本先生とは、対面、Zoom でのミーティングを頻回に行いました。1 回 30 分くらいのこともあれば、数時間に及ぶこともありました。ミーティングをして、一度それぞれ 1 人で作業してから、再度集合して議論をすることもありました。締切日から逆算し使える時間を割り出し、その作業に何分（何時間）かかるのか、作業時間を計算し、計画的に作業を進めていきました。

普段の研究ミーティングや授業においても、常に、作業にかかった時間を測り、今後の作業に必要な時間を予測し、有限な時間を無駄にせず作業を進めるよう指導を受けてきました。時

間を決めないと、ダラダラ作業して、「あ、今日も A の作業しかできなかった。B の作業はまた明日か」と先延ばしの人生が待っています。

私は、見通しがわからないことを決めるのが苦手です。何分かかるかわからないので、見当もつきません。しかし、普段の研究ミーティング、今回の執筆作業を通し、次のことを改めて学びました。有限な時間を自己管理し、決められた質以上のものを決められた期日までに完成させ、素晴らしい成果物を世に送り出す。そして、共著者、共同研究者、仲間と楽しく作業にコミットする。茨の道は、茨ではない。「進まざる

者は必ず退き、退かざる者は必ず進む（福沢諭吉『学問のすすめ』5編）」のだ。

謝辞

本書の執筆作業に私をお誘いくださり、書籍執筆のノウハウを惜しみなく伝授してくださった山本淳一先生、事務連絡含み丁寧な校閲作業をしてくだった金剛出版編集部植竹里菜様、私の執筆にご許可くださった公認心理師の会の皆様に、敬意と共に厚く感謝の意を表します。ありがとうございました。

＜こんな論文書きました＞

行動分析学のフロンティア：反応形成

折原 友尊（明星大学）

折原友尊・丹野貴行（2022）反応形成研究の現状と展望 ―芸術から科学へ―，心理学評論，65，1-19.

https://doi.org/10.24602/sjpr.65.1_1

『心理学評論』にて、拙稿「反応形成研究の現状と展望 ―芸術から科学へ―」が 2022 年に掲載されましたことをご報告させていただきます。本稿の目的は、これまでの反応形成研究で得られた知見を整理して、現状での課題とそれを踏まえた今後の展望についてを論じたものとなっております。本稿の大まかな構成は次の通りとなります。第 1 に、反応形成の歴史的経緯を踏まえつつ、本稿で議論する反応形成の定義とその参照範囲を明確にしました。第 2 に、分化強化と逐次接近を組み合わせた反応形成の手続きを用いた研究に焦点をあて、それらを反応形成の成否を問うものと、その成否を左右する制御変数を探るものの 2 つの視点から整理しました。

第 3 に、反応形成研究における課題を踏まえて、今後の展望として 3 つの方向性を提示しました。最後に、反応形成研究の概念的意義について論じました。

反応形成は、行動分析学において強化スケジュールと並ぶ重要なテーマとして位置づけられています。強化スケジュール研究の隆盛とは対照的に、反応形成の研究は実はそれほど発展していません。そのため、反応形成はいまだ未開拓な領域と言えましょう。もし拙稿を読んでも、反応形成研究に興味を持っていただけたら、此れ幸いです。

ちなみに、この「こんな論文書きました」というコーナーでの記事が掲載された 2014 年は 10 年も前で、さらに更新されたのも 10 年ぶりでした（笑）。自分の研究をたくさんの方により広く知らしめるにはうってつけのコーナーだと思います。皆様もぜひ活用してみてください！

＜日本行動分析学会若手会からの報告＞

福田 実奈（北海道医療大学）

若手会について

日本行動分析学会若手会は 2017 年 1 月に発足しました。初代委員長は丹野貴行先生（明星大学）です。若手会の発足の経緯については、ニューズレター No. 88（<https://j-aba.jp/journal/n188h.pdf>）をご覧ください。若手会の活動理念は、日本における行動分析学の若手育成に資する活動を提案・実施し、それらの活動を通して研究室や専門分野の枠を超えた人的ネットワークの構築を推進することです。

新体制について

委員長 2019 年度から 2023 年度までは松田壮一郎先生（筑波大学）に委員長を務めていただきました。新型コロナウイルス感染症の影響下で思うように活動ができない中、大変なご苦労があったと思います。この場を借りて御礼申し上げます。今年度からは福田が委員長を務めます。丹野先生、松田先生の後任を務めるのは非常に重荷ですが、皆様からのご意見を弁別刺激に職務を全うさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

構成員 今年度からは以下のメンバーで若手会の活動を行なっていきます（敬称略）。

委員：長谷川福子（筑波大学）・井上和哉（立命館大学）・伊藤雅隆（福島大学）・松田壮一郎（筑波大学）・大屋藍子（同志社大学）

サポートメンバー：畑 佑美（専修大学・大阪大学）・中村敏（相愛大学）

もし若手会に加わりたいという方がいらっしゃいましたら福田（mfukuda@hoku-iryo-u.ac.jp）まで遠慮なくご連絡いただければ幸いです。一緒に学会を盛り上げていきましょう！

今年度の活動について

春の学校 数年に一度のペースで開催してきた春の学校を、今年度は対面で実施します。3 月 1 日（土）・2 日（日）に同志社大学（キャンパス未定）で行う予定です。授業の内容は若手会内で鋭意調整中ですので、続報をお待ちください。前回好評だった、「初学者が躓きやすいポイント」を事前に収集してディスカッションする企画は今年度も実施したいと考えております。年次大会の開催に合わせて申し込みを開始できるよう準備を進めておりますので、ぜひ今からご予定ください。

若手研究者口頭発表セッション コロナ禍ではオンライン・ポスター形式で若手研究者優秀発表賞の選考を行ってきましたが、5 年ぶりに口頭発表セッションを開催いたします。このニューズレターが発行される頃には発表申し込みは締め切られておりますが、今年も大変興味深いセッションになりそうです。年次大会の 1 日目、自主企画シンポジウムの枠で開催されますので、皆様奮ってご参加ください。

学生会員年次大会発表助成制度 昨年度、若手会から理事会へ、ABAI 参加への助成事業のように、国内の年次大会についても助成を検討いただけないかどうか、要望を提出いたしました。その結果、今年度の年次大会より、発表を行う学生会員を対象に参加費の免除と交通費の補助をいただけることとなりました。ご尽力いただいた理事の先生方には深く御礼申し上げます。対象となる会員の方はぜひご活用ください。

おわりに

委員間の協議や会員の皆様からのご意見を踏まえて、今後も若手会の活動内容をさらに充実

させていく予定です。皆様のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

注) 本記事は編集部のミスにより 2024 年 7 月 7 日発行の版では掲載されておらず、これを含めた修正版を 2024 年 9 月 12 日に再発行しました。記事をご執筆いただいた福田先生にこの場を借りて謝罪致します。

編集後記

J-ABA ニュースレター115号(2024年夏号)は、理事会各委員会からの報告と、2本の自著・自論文紹介記事で構成されました。各年度の最初の号の記事投稿が少ないという J-ABA ニュース前編集部からの引継ぎを受け、ではその号において、理事会各委員会の活動内容を積極的に発信していこうという形となりました。

また今回は、「自著を語る」と「こんな論文書きました」に、それぞれ1名からの記事のご投稿がありました。J-ABA ニュースは、行動分析学にかかわる著作や論文の情報伝達の場としても機能してきました。自らが執筆した著作や論文を皆に紹介したい！そこに込めた思いを伝えたい！そうした場としても J-ABA ニュースをご活用いただければ幸いです。

(丹野貴行)

J-ABA ニュースレター編集部よりお願い

- J-ABA ニュースでは、会員の皆様からの記事の投稿を募集しています。学会参加記、研究紹介、研究室紹介、施設・組織紹介、書評、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、その他行動分析学の発展に資する記事などが対象となります。投稿にあたっては、Word ファイル形式もしくはテキストファイル形式で、下記の編集部宛に電子メール添付でお送り下さい。
- 掲載の可否は、理事会での審議を経たうえで、編集部で決定します。記事の内容については、公開を前提に、個人情報等の取扱いも含め、各種法令の遵守に十分ご注意ください。また、学術的に明らかに誤った記述、学会活動や行動分析学に全く関係のない記事、営利目的と考えられる記事（著訳書等の紹介を除く）、差別的表現や誹謗中傷が含まれると判断された記事等については、編集部より修正を求める場合や、掲載をお断りする場合があります。J-ABA ニュースにおいて上記に関係する懸念がございましたら、編集部までご相談下さい。
- J-ABA ニュースは、日本行動分析学会のウェブサイトで公開されます。J-ABA ニュースに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。

〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1
明星大学心理学研究室 (27-1201)
J-ABA ニュース編集部 丹野 貴行
E-mail: tantantan01@gmail.com